私はこの一年ほど調査で台湾の「保釣」運動家の話を聞いている。「保釣」とは中国語で尖閣諸島を守るという意味である。中国語では尖閣諸島は釣魚島（もしくは釣魚台）と言われている。すなわち、魚釣島を保護するの意味である。

私が話を聞いている運動家は尖閣諸島への上陸も行った過激派である。その彼が私のインタビューのなかで使った中国語が「求同存異」である。彼の意図は、台湾と日本では立場が違うが何か一致点を見出そうというものであった。日本として領土について譲れないものの、意外にも彼は敵対していても何も果実は得られないという。この言葉は日中国交成立のおりに周恩来が田中角栄に使った言葉でもあり、違いはあるが大きな目標に向かっていきましょうという意味で使ったといわれる。

多文化共生にもこの言葉は当てはまることができよう。違うことばかりを取り上げ、相手を批判してもしょうがない。人間違っていて当たり前。大事なことはその違いを認めつつ（違いを捨てるのではなく）、同じ人間として共通点を見出して理解していくということである。このコラムでは一年を通じて多くの外国の習慣を取り上げてきた。一見、不思議に思えることも人間が助け合っていく工夫のひとつであった。割り勘にせず、おごる習慣も人間関係を長続きさせるものであった。

人間は互いに助け合わなければ生きていけないが、往々にして人は自分の利益を優先させ、自由気ままに生きようとする。それ故だろうか、文化を研究していくとわかるのだが、いずれの文化にも形こそ違えども様々な助け合う仕組みが散りばめられている。助け合うことこそが人間社会の根本なのだと痛感させられる。文化が違う相手には反発を感じることは多いかもしれない。しかし、その時こそ「求同存異」の気持ちでのぞんでみてはどうだろうか。人間は助け合ってこそ人間なのである。

文：県立広島大学　上水流久彦　講師
イラスト：県立広島大学　ロナルド・スチュワート　准教授
2013（平成 25）年　広報あきたかた 1 月号掲載